

令和 2 年 7 月 4 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02459

研究課題名（和文）コロニアルな視線の順応化 ロマン派期英国アイルランド小説再評価

研究課題名（英文）The Domestication of the Colonial Gaze: the Romantic Novel

研究代表者

吉野 由利 (Yoshino, Yuri)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：70377050

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ジェイン・オースティンの小説と、国民小説との間テクスト性をより緻密に検証することで、ロマン派期小説の体系的把握を補い、文学史を修正するアプローチを提示した。オースティンの小説が、「ケルト辺境」で紡がれたマライア・エッジワースの国民小説の「男性的な」コロニアルな視線をイングラントを舞台にした家庭小説の枠組みに順応化し、「女性的な」視線に変容させていること、そしてこの変容こそ、帝国の拡大に伴い理想的な国民像の更新を必要とする時代の要請に巧みに応えていることを検証した。オックスフォード大学や欧州ロマン派研究連合の研修で、手稿研究の方法論と成果のデジタル発信技術を更新し、「公衆関与」にも取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロマンスとリアリズムを混在させるロマン派期小説は、リアリズムを重視する文学史観の影響で過小評価されてきた。その発展途上にある体系的把握において、最大の難点はオースティンの作品の位置づけである。本研究は、その解明方法の一つを提示する学術的意義がある。また、オースティンの家庭小説が国民小説を順応化する特徴は、夏目漱石が英国近代小説を日本文学へ順応化して受容した際の文学観の理解を深める鍵となることを示した学術的意義を持つ。また、対象作品のデジタル版の作成や同時代の物質文化を紹介するオンライン展示の社会的意義は、Covid-19の感染拡大で国際的に学校・文化機関が閉鎖した際、再確認されている。

研究成果の概要（英文）：This research project contributes to the systematic understanding of the Romantic novel and revises literary history of English literature by exploring the intertextuality between Jane Austen's novels and national tales of the same period. In particular, this research project has argued that Austen's domestic novels, set in the English countryside, domesticates the 'masculine' colonial gaze formulated by Maria Edgeworth's national novels in the 'Celtic fringe', and thereby tactfully meets the demands of her time to revise the ideal of patriots in the expansion of the British empire. In its final year, part of this project was developed by the principal investigator's training at the workshops of the Edgeworth Papers project and digital editions course at the University of Oxford and the virtual exhibition project of European Romanticisms Association (REVE).

研究分野：英文学

キーワード：イギリス文学 アイルランド文学 ジェイン・オースティン マライア・エッジワース 家庭小説 国民小説

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、科研費若手研究 B「女性小説家と愛国主義の創作」(H18-20 年度)、同「国民小説とオリент表象」(H22-24 年度)、科研費基盤研究 C「国民小説におけるリアリズムとロマンスの交錯」(H25-27 年度)で得られた成果と視点を発展させたものである。「ケルト辺境」を舞台にした国民小説は、合同体制という政治的現実と文学的な交渉を展開する際、文化的・社会的他者と帝国の支配階級のあり方を提示する。国民小説がリアリズムとロマンスを混在させる「コロニアルな視線」は、オースティンのイングランドを舞台にする家庭小説が理想的な国民を描く際転用され、「女性的な」視線に変容されているのではないかと着想した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、再評価が進むロマン派期英国・アイルランド小説の体系化を補い、文学史を修正することである。ロマンスとリアリズムを混在させるロマン派期小説は、リアリズムを重視するイアン・ワットの文学史観の影響で過小評価されてきた。その見直しは着手されているが、包括的と言いがたい。最大の難点はジェイン・オースティンの扱いである。ロマン派期小説の正典として再定義される一方、基幹サブジャンルである国民小説との間テクスト性の検証に議論の余地を残しているからである。本研究は、オースティンのイングランドを舞台にする家庭小説が、「ケルト辺境」でリアリズムとロマンスを混在させる国民小説の「男性的な」コロニアルな視線を順応化すること (domestication) で、帝国の拡大に伴い理想的国民像の再定義を必要とする時代の要請に巧みに応えていることを独自に示す。

## 3. 研究の方法

オースティンが受けたエッジワースの影響については、主に 1970 年代の Marilyn Butler をはじめとする先行研究で論じられてきたが、そのほとんどは『ベリンダ』などエッジワースのイングランドを舞台にした家庭小説との比較を軸に展開してきた。本研究では、エッジワースのアイルランドを舞台にした国民小説の主要作品(『ラックレント城』、『倦怠』、『不在地主』、『オーモンド』)を比較対象としている独自の方法論が特徴となっている。

「コロニアルな視線」の理論的理解には、19 世紀後半の在インドのイングランド出身の女性たちの著したテクスト、および彼女たちの表象を検証した近刊の論文集 Susmita Roye and Rajeshwar Mittapalli 編 *The Male Empire Under the Female Gaze* (2013)の方法論と知見を援用した。Roye と Mittapalli は、「コロニアルな視線」は男性と女性両方の眺望を包摂するものの、結局は帝国の支配を担い、帝国をイメージ化する男性中心の視座にあるので、「男性的な」視線であるとしている。エッジワースは女性作家であるが、その国民小説は、アイルランドとグレート・ブリテンの合同体制を読者に強く意識させる形でアイルランド支配のあり方を描いているため、作品が構築する「コロニアルな視線」は「男性的」であると捉え、オースティンの小説が主にヒロインの視座から構築する「女性的な」視線と対比した。

平成 28 年には、クック大佐の太平洋探検を再評価する特別展示が大英図書館で開催され、展示の視覚表象、記録、英国に持ち帰った植物などの標本などの分析を通し、歴史上の「コロニアルな視線」の特徴を把握した。

海外での文献調査は、大英図書館、オックスフォード大学附属図書館を中心に行った。

## 4. 研究成果

(1) エッジワースのアイルランドを舞台にした国民小説の主要作品が、アイルランドとグレート・ブリテンのあり方を表象する際に紡ぎ出す「コロニアルな」視線が、オースティンの主要作品によってイングランドの片田舎の中流階級の日常を描く家庭小説の枠組みに順応化されていることを確認した。

(2) 端的には、エッジワースの国民小説が現前する植民地の支配階級の男性の主人公(『倦怠』の場合語り手も兼ねる)さらにアイルランドの植民地状況に精通している架空の男性編者(『ラックレント城』)の視線がリアリズムとロマンスを交錯させ帝国のあり方を描く特徴が、オースティンの主要小説においては、主にヒロインの視線の特徴として転用されているという意味で、「女性化」されていることを検証した。

(3) オースティンの主要小説では、ヒロインの視点を読者が共有する形式で主に展開するが、ヒロインの視線が結婚相手となるヒーローを理想的な国民として描出する際、リアリズムとロマンスを交錯させていることを確認した。この傾向は、『説得』について、『分別と多感』、『マンスフィールド・パーク』において顕著であると分析した。

(4) オースティンとエッジワースの作品の同時代の受容も、書評の再読を中心に検証した。

当初はエッジワースの作品の方がオースティンの作品よりも文壇で高い評価を得ていた。Butlerによれば、転換期は1820年代で、キリスト教信仰を重んじる批評の風潮のためとされる。しかし、本研究は、両作家の文壇での評価が逆転したのは、エッジワースの作品が宗教色に乏しいということに加え、「男性的な」コロニアルな視線を展開するからではないか、と考察した。Jacqueline Belangerの受容研究によれば、エッジワースのアイランド表象は、アイランドを訪れたことのない評者たちによって、『ラックレント城』(1800年)刊行直後から、その信憑性がしばしば疑問視された。1810年代には、アイランド表象が真実に基づくかどうかという観点よりも、真実のようにみえるかどうかという観点に重点をずらせた批評言説が形成され、エッジワースの国民小説の語りの権威が低下した、という。したがって、エッジワースの国民小説のコロニアルな視線の権威は、1810年代までには低下したのではないかと見解した。

- (5) 1810年代には、イギリス帝国の専門職の男性の社会と家庭を描いたエッジワースの長編小説『パトロニッジ』(1814年)も、女性の直接知りえない世界を書いたものとして信憑性がなく、女性に相応しくない表現を用いている、といった理由で文壇で酷評され、版を重ねた際には一部書き直しを余儀なくされた経緯がある。このようにエッジワースの作品がしばしば「男性的な」視線を構築する文学的な試みが、ジェンダー規範を逸脱するものとして批判された受容のケースも再検証した
- (6) 本研究で、対象作品が読者を誘導する技巧として、語り手や登場人物の「コロニアルな」視線や「ロマンス化する」視線を中心に検証した過程で、当時の読者たちがどのような視線でオースティンやエッジワースらの作家像を構築しているのか、という問題への接続も重要であることを着想した。予備的論考を発表したが、より厳密な歴史的検証が必要になるので、別課題として申請し、令和2年度に採択され現在着手している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉野由利	4. 巻 18
2. 論文標題 女性の越境と「文芸共和国」－『放浪者』と『パトロニッジ』におけるナショナル・アイデンティティの構築と「公共圏」の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文	6. 最初と最後の頁 57-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野由利	4. 巻 66
2. 論文標題 19世紀文学観光－オースティンとエッジワースを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学習院大学文学部研究年報	6. 最初と最後の頁 73-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 YOSHINO Yuri	4. 巻 10
2. 論文標題 Maria Edgeworth's Representation of India: The British Empire and Sympathy in 'Lame Jervas' (1804)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ジェイン・オースティン研究	6. 最初と最後の頁 115-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 5件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Yuri Yoshino
2. 発表標題 Edgeworthstown house
3. 学会等名 欧州口マン派学会連合(ERA)共同研究Dreaming Romantic Europe Oxford Workshop (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuri Yoshino
2. 発表標題 Maria Edgeworth's Afterlife and Edgeworthstown House
3. 学会等名 英国18世紀学会 (BSECS) 第49回年次大会 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yuri Yoshino
2. 発表標題 Sensibility and Slavery: The Impact of 'The Grateful Negro' by Maria Edgeworth
3. 学会等名 IASIL 2018 Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuri Yoshino
2. 発表標題 Stories for the Children of the Empire: Maria Edgeworth's Popular Tales (1804)
3. 学会等名 IASIL Japan 2018 Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuri Yoshino
2. 発表標題 Maria Edgeworth's Readerly Strategies and Social Vision: Popular Tales and Patronage
3. 学会等名 Maria Edgeworth 250 Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuri Yoshino
2. 発表標題 Sensibility and Slavery: The Impact of 'The Grateful Negro' by Maria Edgeworth
3. 学会等名 International Association for the Study of Irish Literatures (IASIL) 年次大会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuri Yoshino
2. 発表標題 Cultivating Stories: Children's Fiction in Irelandシンポジウム
3. 学会等名 IASIL Japan 年次大会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉野由利
2. 発表標題 19世紀英国とアイルランドの文学観光—AustenとEdgeworthを中心に
3. 学会等名 日本英文学会第88回大会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 吉野由利
2. 発表標題 英文学の正典と受容—文学観光の事例から
3. 学会等名 第36回西洋社会科学古典資料講習会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 Yuri Yoshino, Mika Suzuki, Kimiyo Ogawa, Noriyuki Hattori, Hideichi Eto, Tadayuki Fukumoto, Miki Iwata, Noriyuki Harada, Masaaki Ogura, and Hitoshi Suwabe	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Bucknell University	5. 総ページ数 62-73(予定)
3. 書名 Johnson in Japan	

1. 著者名 小沢奈々、安形麻理、増田勝彦、中井えり子、小倉欣一、岡本幸治、床井啓太郎、福島知己、吉野由利	4. 発行年 2016年
2. 出版社 一橋大学社会科学古典資料センター	5. 総ページ数 38 (35-38)
3. 書名 第36回西洋社会科学古典資料講習会テキスト	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

<p>Yuri Yoshino "Edgeworthstown House" (オンライン展示)</p> <p><a href="http://www.euromanticism.org/virtual-exhibition/">http://www.euromanticism.org/virtual-exhibition/</a> "Romantic Europe: the Virtual Exhibition" プロジェクト European Romanticisms in Association</p> <p>"Edgeworthstown House"の記事は、2020年8月7日公開予定決定。</p>
--

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----